

アンケート回答抜粋（自由記述）

（仕事の基礎能力）

ACS の面接で説明担当をすることで、責任を持って自分の言葉で組織の活動をポジティブに説明すること、また相手の話したいことを引き出すことを経験できた。

図書館総合展でポスターの前に立って来場者に説明することで、相手の興味に合わせてコミュニケーションを取りながら説明をする経験ができた。

課題検討グループの活動で仕事量がかなり増加したので、時間管理能力の大切さに気づいた。時間管理能力が向上し、効率的な業務の進め方を意識するようになった。

全体チーフとしての経験から、ある組織をマネジメントすること、特に承認を受け、活動をオーソライズするにはどこにポイントがあるかということや、そのための話の組み立てをどうするかというようなことを、やや組織が流動的であったが故にかえって、より意識的・自覚的に行うようになった。

（仕事のスタイル）

イベントや展示の短期間での企画運営を数多く経験したことで、働く体力が上がった。たとえばの目安として、「打ち合わせ 3 回、業者との打ち合わせ 1 回、各自作業時間 3 時間、パーツ作成 & 組立作業 2 回」ぐらいの作業時間があれば、本務をフルで抱えながらも 1 ヶ月後に小さな展示ひとつ開催できるということは、今後もずっと覚えておきたい。

限られた時間の中で、年齢も立場も異なる複数のメンバーが共同でひとつの業務を成し遂げるための効率的かつ合理的なメソッドを、少なくとも模索する姿勢が身についた。

与えられた仕事をこなすタイプの業務ではなく自分たちで計画を立てて、質を高めていくタイプのプロジェクト型業務を経験できた。

（個別のスキル）

Google ドライブやサイボウズ Live、Flickr などのオンライン共有ツールの便利さ。Google ドライブでは、メールで一つのファイルをやり取りしつつ編集するよりも、短時間で効率的に複数人の目を反映させることができる。

イベント等の動画配信や動画撮影を、ほとんど知識や経験がない状態から試行錯誤しつつ行ってきて、検討 G に参加する以前と比べてはるかに知識や技術が向上した。

(既存の業務、組織に対する意識の変化)

検討Gの活動では、全学的な視点で考えたり、物事の本質がどこにあるか考えたりする必要があり、以前よりも俯瞰的な視野で物事の本質を捉えて考える事ができるようになった。

学生協同チームの活動を通して、学生と接することの難しさと、それでもなお図書館が学生に関わっていく必要があることについて、認識を深めた。

多くの新図書館関係教員と日常的に接することにより、異質な思考に触れる機会が増え、徐々に考え方の範囲が広がられていったように思う。これは変革期にあって極めて重要なことで、図書館職員の意識が一度図書館を超えておかなければ、何も見えないのだと思う。

推進室の教員から刺激を受け、考え方が変わったように思う。「前もやっていたからこれでいいや」ではなくて、なぜそうするのか、そうするのがよいことなのかなど、根本から考えるようになった。

イベント司会や人前でのプレゼンをするなど、「図書館の顔」の役割を演じる機会を通じて、図書館という場所や、自分たち図書館職員をどういう存在として見せていくべきなのかという問いを日常的に考えるようになった。

(モチベーション)

検討グループには「やってみよう」という雰囲気があると感じます。本務でも色々と提案してみようという前向きな姿勢を持つことができるようになり、良かったです。

検討Gに加わらなければ知らなかったような、他のメンバーの優れた点などを目の当たりにすることができ、東大図書館で働くことに対するモチベーションが上がった。

(人からの刺激)

なんといっても、(イベント運営を通して)アカデミックなスタープレイヤーの方々を間近で拝見し、その知の一端にわずかながらでも触れることができたことです！

前の職場も今の職場も、ロールモデルとなる存在(自分より少し上の先輩)がいないので、自分より経験年数が上のチームメンバーの動き方を間近で見ることができてよかった。

通常の業務の枠を超えて、多くの人と仕事をともにする機会があり、そうした経験自体が貴重なものだと思う。